

Martin-Löf 教授講演会のお知らせ	海外学会情報
在外研究報告	寄贈図書紹介
大会実行委員会からのお知らせ	『科学哲学』バックナンバー在庫一覧
会務報告	事務局からのお知らせ
会計報告	編集後記

Per Martin-Löf 教授講演会のお知らせ

日本科学哲学会会長 野本和幸

下記の通り、Martin-Löf 教授の講演会を開催いたします。会員の皆様には奮ってご出席下さいませようお願い申し上げます。

記

日時：2004年6月12日(土) 10:30 ~ 17:00

場所：専修大学神田校舎 7号館 782室(教室変更の場合は掲示します)

予定：10:30 ~ 12:00 Martin-Löf 氏のレクチャー

13:30 ~ 17:00 特定提題者の発表とディスカッション(交渉中)

直観主義タイプ理論の創設者として世界的に著名な Per Martin-Löf 氏は、現代論理学・コンピューター科学の指導的な研究者であるのみならず、論理学の哲学についても重要な研究を発表しておられます。今回、京都大学の招きで来日されたのを機会に、上記の通り、本学会の後援でレクチャーをして下さることになりました。

詳細は5月下旬に本学会ホームページ上でお知らせします。

在外研究報告

1. インディアナ大学哲学科の思い出

ピッツバーグ大学古文書庫探訪小記とともに

蟹池陽一(東京大学大学院総合文化研究科
共生のための国際哲学交流センター、
アソシエート・フェロー)

もう帰国して一年余りになりますが、小生は1997年8月から2002年8月までインディアナ大学哲学科に大学院生として、2002年9月から同年末までスタンフォード大学哲学科に客員研究者として滞在していました。スタンフォードには一年滞在の予定が、着いて早々帰国することになってしまいましたので、主としてインディアナ大学の往時を偲んで¹みたいと思います。

小生が主として論理学の哲学に関心を持って、インディアナ大学に留学した当初は、同大学の哲

学科は、論理学、カント研究、分析哲学史で有名でした。論理学では、ジョン・バーワイズ John Barwise(数学科、計算機科学科と兼任)、マイケル・ダン Michael Dunn、アニール・グプタ Anil Gupta、ニーノ・コキャレラ Nino Cocchiarella、D. C. マッカーティー D. C. McCarty があり、カント研究ではマイケル・フリードマン Michael Friedman(科学史・科学哲学科と兼任)、フレッド・バイザー Fred Beiser、グラシエラ・デピエリス Graciela DePierris、

ポール・フランク Paul Frank がおり、分析哲学史ではフリードマン、コキャレラ、マッカーティーがいました。因みに、中世哲学のスペード Spade は、中世論理の専門家でもありました。それから、数学科には、モス Moss、ソレッキー Solecki が、計算機科学科にレイヴァント Leivant がいました。カント研究との関連では、科学史・科学哲学科に、ニュートン・ライプニッツ研究で有名なメリ Meli がいました。

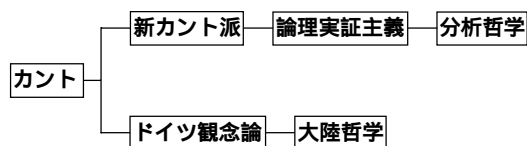
論理学関係では、学科横断的に、パーワイズ、ダン、モスらを中心として、哲学的関心を伴った形式論理学研究が活発になされていたが、他方、哲学科のマッカーティーは、直観主義論理学や論理学史をやっていました。彼は、学生に対しても非常に親切であり、色々と読書会を主催したりもしていました(ヒルベルトやブラウワーの著作をとりあげた論理学史関連のものや、P. マデーの集合論についての哲学的考察を取り上げたもの等)。それから、私が博論を執筆していた頃の大学院授業で二十世紀分析哲学を彼が担当していましたが、(個人的にはAI²としての自分の担当授業との兼ね合い等で最終回以外はのぞけなかったので伝聞ですが)そこでは、特にウィットゲンシュタインについての彼独自の解釈が加味されていたそうです(『論考』を、当時の論理学の状況を踏まえた、その時期のウィットゲンシュタインの論理的視点を従来よりも重視して解釈していくものだったそうです)。パーワイズは、私が行った年にはサバティカルで、三年目の『論理学の哲学』の授業の途中で急逝したため、残念ながら、彼自身の生き生きとした姿に触れたのは、彼がサバティカルの年の9月の、情報と可能性についての論理学考察がテーマの講演のみでした。

カント関係では、フリードマンが、従来十分には重視されていなかったと思われる、自然科学(当時の自然哲学)へのカントの関心に着目した独自の研究を展開していました。1999年春学期での彼のセミナーは、その一端を示すものでしたが、これは、『純粋理性批判』第二版出版の前年に出版された『自然科学の形而上学的基礎』[*Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*]に焦点をあて³、後者と前者、特に前者の改訂部分(「純粋悟性概念の超越論的演繹」,「純粋理性の誤謬推理について」)・追加部分(「観念論に対する論駁」,「原則の体系に対す

る一般的注)とを対比させて考察していくというものでした。『純粋理性批判』が自然一般についての一般的形而上学で、『自然科学の形而上学的基礎』は物質的自然についての特殊形而上学だということにカントは考えていたであろうという解釈がなされ、『純粋理性批判』で示される一般的な悟性の原理に、物質という経験的概念について対応するものが『自然科学の形而上学的基礎』で示されているとされます。逆に言うと、カントは、ニュートンの科学を前提とした『自然科学の形而上学的基礎』を一般化したものが、『純粋理性批判』であると考えていたという解釈がされていました⁴。

私自身は、カント研究者ではないので、個人的な関心からは、セミナーの最初の方で語られた、幾何学についてのカントの見方についての解釈が印象に残りました。カントは、幾何学における構成(construction) 線を引いたりするような図形を構成する操作 を基盤的な要素としてとらえ、例えば幾何学的公理の証明はないが、構成活動により証明可能であると考えていたとされます。即ち、アプリアリな想像力が公理を根拠付けているということです。この幾何学での構成は、運動として捉えられます。カントは、この運動を幾何学の基盤としてとらえ、構成としての運動により、幾何学でのアプリアリな総合命題の可能性を説明しようとしたとされます。

因みに、フリードマンが、このカントについての授業の冒頭で、冗談めかして次のような系図を書いていた。(一部省略・補足)



哲学史的な是非はともあれ、強く印象に残る出来事でした。日本にいたときには、伝統的な哲学と分析哲学との非連続性のイメージを持っていましたが、アメリカに行くと、この他にも、両者の連続性の認識を示す言動に遭遇し、新鮮な印象を受けました。具体的に特に紹介するほどのエピソードは他にはとりたててはありませんが、日常のちょっとした話の節々でそういう認識を示す言葉があったという感じです。

フリードマンは又、カルナップ、シュリック、ライヘンバッハ等の論理実証主義の歴史的再評価の全米的な中心人物でもあります⁵。私のいたときには、この分野についてのセミナーはありませんでしたが、科学史・科学哲学の大学院の入門的講義で、ヘルムホルツ、マッハ、ポアンカレ、シュリック、カルナップへとたどる、論理実証主義・科学哲学の形成史をテーマとしたものがありました⁶。

さて、インディアナ大学の哲学科には、上記以外の分野については、教員の絶対数もそれ程多くなく、目立った人々では、行為論のオコナー O'Connor、倫理学・法哲学のムーディー＝アダムズ Moody-Adams、計算機科学の哲学のブライアン・スミス Brian Smith (計算機科学科と兼任) がいた位でした。このように、ここはかなり特定の分野に特化したところでした。

しかし、私が在学した五年間の間に大きな変動が生じました。コキャレラの引退、パーワイズの突然の夭折に始まり、グブタもピッツバーグへ移り、最後の止めで、2002年夏にはフリードマンとデビエリスがスタンフォードへ、バイザーがシラキューズへ移りました。又その間、ダンも自ら創設した School of Informatics に活動の中心を移しましたし、若手のフランクまでノートルダムに行ってしまった有様です。こうして、私が学位を得た年までには、その他の移動(ムーディー＝アダムズの転出等)も含めて5年間で十名を超える教員がいなくなり、それを少し下回る数の教員が着任しました。その結果として、97年秋と2002年秋とでは、哲学科の特徴が全く変わってしまっていました。新たに来た人々は、認識論・心の哲学(クラーク Clark、トリビオ Tribio その他)や倫理学関係(マルシア・バロン Marcia Baron その他)が中心でした(その後、ジョーン・ウィナー Joan Weiner が着任して、分析哲学史関係はやや補填されたようですが)。加えて、フリードマンやパーワイズのような全米的に有名な大物の穴は、埋められませんでした。アメリカの大学では一般に教員の流動性が高いとは聞いていましたが、ここまで激しい状況を目の当りにするとは思っていませんでしたので、なかなか驚きました。この大移動が本格的に現実化したときは、幸い、ちょうど小生が分析哲学史で書いた博論(カルナップについてのもの)を提出し終えた頃で、

個人的には余り影響を受けませんでした。(それどころか、スタンフォードの哲学科で客員研究者として滞在できたのは、小生の師のフリードマンが転任したおかげでした。)

こういう大変動は、インディアナ大学だからというわけではなく、スタンフォード大学のようなところでもあるようです。実際、数年前は引退・転出でスタンフォードの哲学科もかなり危機的状況に陥ったようです。ただ、人を失った後に比較的短期間に回復できる資金力があるかないかが、インディアナのような州立大とスタンフォードのような裕福な私立大との大きな違いのようです。

追記: ピッツバーグ大学科学的哲学古文書庫訪問

偶々、最近ピッツバーグ大学のヒルマン図書館特別収集部の科学的哲学古文書庫(Archive for Scientific Philosophy)に行き、カルナップ・コレクションとライヘンバッハ・コレクションとを閲覧してきました。ピッツバーグ大学の科学哲学センターは日本でも有名で、在籍された方々もいらっしゃいますが、この科学的哲学古文書庫の方はそれ程有名でもないかもしれません。カルナップの資料としては、ここドイツのコンスタンツ大学のコレクションとが世界で双璧をなします。彼の草稿、メモ、蔵書、出版用の校正原稿、講演のトランスクリプト等、手紙が、膨大な量で收藏され、整理されています。速記のメモや草稿も、一部は解読されて、トランスクリプトされています。ライヘンバッハ・コレクションも同様にかんりのものようです。他にも、ファイグルの資料等色々あるようです(詳細は、下記のサイトを御参照下さい)。昔は、日記も公開されていたらしいのですが、今は非公開になっています。今回は、インディアナにいた頃に初めて訪れて以来通算三回目の訪問でしたが、それでも、全てを閲覧できたわけではありません。行く度に新たな発見があるという感じでした。

ピッツバーグ大学の周辺は、ピッツバーグの中心部からは離れたところにあり、土日は、空港への交通がやや不便でした。寒いところで、東京ではかなり暖かい時期でしたが、向こうでは雪が降り、コートなしでは過ごせませんでした(おかげで、ちょうど帰ってきたときに東京が急に寒くなって風邪を引かずにすみました)。食という点では、非常に辟易しました。インディアナ大学

のあるブルーミントンもそうでしたが、ピッツバーグ大学周辺はさらにひどいものでした。ブルーミントンは、小さい街で、インディアナポリスまで車で1時間位、シカゴまで車で5時間位というところだったこともあってか、それなりにましなところもないこともなかったのですが、ピッツバーグ大学周辺は、ピッツバーグという大きな都市の一部で、そこで不満のある人は他へ行けばいいという状況のせい、学生向けの量だけあるといったところが大半でした。今回は、久しぶりにお会いしたグプタ教授にまともなところを教えてもらったので、多少は助かりましたが、東京は食の点では非常に恵まれていることを痛感致しました。

注

1. こう書くのは後述するような事情があるからです。

2. Associate Instructor : インディアナではteaching assistant のことをこう呼んでいました。
3. 因みに、フリードマンは伝統的にはそれほど重視されていなかった『自然科学の形而上学的基礎』を、カントの前批判期、批判期、後批判期を結びつける重要な著作とみなしています
4. 五年前のことですが、当時の自分のノートは、乱筆ゆえに今は読めない部分が多いので、正確な詳細は記せませんが、非常に鮮烈な印象を与えられたことは覚えています。
5. 彼との出会いがなければ、私がカルナップで博論を書くことはなかったでしょう。
6. フリードマン以外のカント研究者では、バイザーは、カント以外には、ドイツ観念論もやっていたようです。カントとフレーゲとの比較などもやっていたデ・ピエリスは、当時はヒュームを中心に研究していたようです。

<http://www.library.pitt.edu/libraries/special/asp/archive.html>

大会実行委員会からのお知らせ

大会実行委員長 内井惣七

1、第37回大会(京都大学吉田キャンパス)のプログラムの概要について

詳細は次号のニュースレターでお知らせしますが、現在以下のようなプログラムが予定されています。

10月2日(土)

特別講演：京都大学理学部教授、西田利貞氏

シンポジウム：「フレーゲ その歴史的的位置付けと展開」

司会：野本和幸 提題者：三平正明・佐藤雅彦・松阪陽一

10月3日(日)

ワークショップ 午前

・計算数学

司会：出口康夫 提題者：照井一成、三好博之、村上祐子、小川芳範

・人間原理のワークショップ

司会：横山輝雄 提題者：三浦俊彦、柏端達也、千葉剛

ワークショップ 午後

・「思考の言語(Language of Thought)」とコネクシオニズム

司会：柴田正良 提題者：服部裕幸、信原幸弘、戸田山和久、美濃正

・リスク分析の方法論と哲学

司会：齊藤了文 提題者：蒲生昌志、小澤守、伊勢田哲治、岩崎豪人

2、研究発表者の募集について

前回のニュースレターでもお知らせしましたが、研究発表の申し込み締め切り期日は下記の通りとなりますのでご注意ください。

2004年6月21日(月) 日本科学哲学会事務局必着



会務報告

(2002.4.1 ~ 2003.3.31)

日本科学哲学会第10期理事会

第18回

日時：2003年6月28日(土)13:30 ~ 15:00

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
 2. 2004年度大会について
 3. 科研費出版助成について
 4. 名誉会員について
 5. 講演会の後援について
 6. 非会員ワークショップ参加者の謝礼について
 7. その他

評議員選挙について

第19回

日時：2003年9月13日(土)14:00 ~ 14:50

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
 2. 11期役員選挙について
 3. 科研費出版助成について
 4. 会長選挙について
 5. その他

選挙状況について
 会費の値上げについて
 役員について
 会員について

日本科学哲学会第11期理事会

第1回(第10期第19回と合同開催)

第2・3回

日時：2003年11月15日(土)、16日(日)12:15 ~ 13:30

- 議題：1. 選挙結果について
 2. 次期編集委員長について
 3. 監査報告
 4. 新入会員・退会会員について
 5. 第37回大会について
 6. 『科学哲学』36巻2号の製作進行状況について
 7. その他

選挙について

第4回

日時：2003年12月20日(土)14:00 ~ 15:00

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
 2. 36回大会について
 3. 2003-4年度編集委員について
 4. その他
 学会運営について

第5回

日時：2004年3月27日(土)14:30 ~ 15:30

- 議題：1. 新入会員、退会会員について
 2. 第37回プログラム進行状況について
 3. 2003-4年度編集委員の任期について
 4. その他

評議員の人数について
 会費について

『科学哲学』第36巻編集委員会

第3回

日時：2003年6月28日(土)15:15 ~ 16:30

- 議題：1. 応募論文の審査状況について
 2. 『科学哲学』36巻1号の編集状況について
 3. 『科学哲学』36巻2号の編集状況について
 4. 科研費出版助成について
 5. 書評に取り上げるべき書籍について
 6. 編集委員会の基本方針について(問題点の洗い出し)

第4回

日時：2003年9月13日(土)15:05 ~ 16:10

- 議題：1. 応募論文の審査状況について
 2. 『科学哲学』36巻2号の編集状況について
 3. 書評に取り上げるべき書籍について
 4. その他
 レフェリーについて

『科学哲学』第37巻編集委員会

第1回

日時：2003年12月20日(土)15:30 ~ 17:20

- 議題：1. 新編集委員について
 2. 『科学哲学』36巻2号の編集状況に

ついて

- 3. 応募論文審査状況について
- 4. 書評に取り上げるべき書籍について
- 5. 次号の特集について
- 6. その他

論文審査のブラインド制について

1月刊行の『科学哲学』に載せる編集委員について

次会ニューズレターについて

第2回

日時：2004年3月27日(土) 15:15 ~ 16:30

- 議題：1. 応募論文審査状況について
- 2. 『科学哲学』37巻1号の製作進行状況について
- 3. 書評に取り上げるべき書籍について
- 4. 編集委員会の問題点について

第36回大会実行委員会

第2回

日時：2003年6月28日(土) 16:45 ~ 17:45

- 議題：1. 第36回大会のプログラムについて
- 2. その他

非会員ワークショップ参加者の謝礼について

第3回

日時：2003年9月13日(土) 16:30 ~ 17:30

- 議題：1. 第36回大会のプログラムについて
- 2. その他

ワークショップの資料について

第37回大会実行委員会

大会実行委員長を中心に、関西地区で随時開催し、第11期理事会で報告。



会計報告

【2002年度決算】

収入：前年度繰越金	2,590,471
学会費納入	2,133,000
大会参加費	101,000
学会誌売上	57,310
預金利息	163
出版社著作権協議会分配金	45,000
合計	4,926,944

支出：35巻1号制作費(700部制作)	623,000
35巻2号制作費(700部制作)	461,725
ニューズレター制作費	81,800
名簿制作費	265,265
第35回大会運営費	352,714
通信費	366,935
印刷費	189,710
消耗品費	98,939
委員会交通費	248,000
事務局費	106,100
アルバイト代・手数料	126,760
小計	2,920,948
次年度繰越金	2,005,996
合計	4,926,944

【2003年度予算】

収入：前年度繰越金	2,005,996
学会費納入	2,200,000
大会参加費	150,000
学会誌売上	100,000
預金利息	200
出版社著作権協議会分配金	45,000
合計	4,501,196

支出：36巻1号制作費(700部製作)	400,000
36巻2号制作費(700部製作)	400,000
ニューズレター制作費	100,000
第36回大会運営費	300,000
通信費	300,000
印刷費	200,000
消耗品費	70,000
委員会交通費	250,000
事務局費	100,000
事務局補助給与	480,000
アルバイト代・手数料	70,000
予備費	1,831,196
合計	4,501,196



海外学会情報

海外の学会情報については、以下のサイト、及びそれらからのリンク等をご参照下さい。

- EpistemeLink.com
http://www.epistemelinks.com/Main/MainEven.aspx
- The Philosophical Calendar

http://www.crvp.org/Philosophical_Calendar/index.html

- Events in Analytic Philosophy in Europe (and Overseas Countries)
<http://sifa.unige.it/2eve/con.htm>



寄贈図書紹介

2003年4月1日～2004年3月31日

石黒ひで著
『ライブニッツの哲学 論理と言語を中心に』(増補改訂版) 岩波書店

R・M・チザム著、上枝美典訳
『知識の理論』 世界思想社

戸田山和久・服部裕幸・柴田正良・美濃正編
『心の科学と哲学 コネクションニズムの可能性』 昭和堂

『大学教育学会誌』第25巻第1号、第2号
大学教育学会



『科学哲学』バックナンバー在庫一覧

タイトル	定 価		
4 (1971年)	1,200円	24 (1991年) 異文化理解の基礎	1,800円
5 (1972年)	1,000円	26 (1993年) 科学的説明	2,000円
6 (1973年)	非売品	27 (1994年) 量子力学と物理的实在	2,000円
7 (1974年) 記号・情報・論理	1,300円	28 (1995年) カオスをめぐって	1,200円
8 (1975年) 行為の理論	1,300円	29 (1996年)	1,800円
9 (1976年) 様相論理学	1,300円	特集1 デュエムの科学哲学の現代的意義	
10 (1977年) 心身問題と道徳	1,300円	特集2 サイバネティクス	
11 (1978年) 解釈とモデル	1,500円	30 (1997年) 近代における科学と哲学	1,500円
12 (1979年) 言語と非言語	1,500円	31-1 (1998年)	1,500円
13 (1980年) 社会科学と哲学の間	1,500円	31-2 (1998年) 生物学的説明	1,500円
14 (1981年) 論理とは何か	1,600円	32-1 (1999年)	1,500円
15 (1982年) 科学哲学の展望	1,600円	32-2 (1999年) 医療の哲学に向けて	1,500円
17 (1984年) 合理性とは何か	1,700円	33-1 (2000年)	1,500円
18 (1985年) 志向性について	1,700円	33-2 (2000年) 心・生命・コンピュータ	1,800円
19 (1986年) 言語理解	1,700円	34-1 (2001年)	1,500円
20 (1987年) 意識・機械・自然	1,700円	34-2 (2001年) 進化論から見た心と社会	1,500円
21 (1988年) 私 の同一性	1,700円	35-1 (2002年)	1,500円
22 (1989年) 科学と反 - 实在論	1,800円	35-2 (2002年) クワインの哲学	1,500円
23 (1990年) 科学哲学の未来を問う	1,800円	36-1 (2003年)	1,500円
		36-2 (2003年) ラッセルのパラドックス・100年	1,500円

購入を希望される方は、事務局宛ご連絡下さい。(1～3巻、16巻、25巻は在庫切れです。)



事務局からのお知らせ

1. 学会費納入のお願い

2004年度の学会費をお納め下さいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さいますようお願い申し上げます。なお、「-」表示の方は完納となっております。



編集後記

なんだかボーっとしている。というわけで、ニュースレターの記事の依頼をすっかり忘れていたのでした。事務局には入稿が遅れてしまったことをおわびいたします。とはいえ、事務局の方も、現都立大がとんでもないことになっているので、それどころではなかったのでしょうか。さいそくの「さ」の字もありませんでした。ところで、都立大は「首都大学東京」とかいうなかなか不思議な名前の大学になるらしく、冗談でおそろおそろ「首(くび)大って呼ばれるようになるんじゃないの」と不謹慎なことを言ったら、「もう呼ばれてますよ」とのことでした。それはともかく、おおあわてで身近にいた蟹池陽一さんにインディアナでの様子を書いていただくことにしました。快諾していただいたのはよかったのですが、彼も東大のCOE等で「目の回るような忙しさで」(本人談)なかなかたいへんでした。実に、私の職場もそんなこんなやら法人化やらでともかくバタバタしています。それほど年寄りとは思っていないのですが、変化があまりに急速なので、つい「昔はよかった」などとつぶやいてしまう今日この頃ではあります。というわけで、なんだかボーっとしているのです。わたし個人の呆人化は確実に進んでいます。

(野矢茂樹)

日本科学哲学会ニュースレター No. 28 2004年5月20日

編集兼発行 日本科学哲学会

事務局 〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
東京都立大学人文学部哲学科内 日本科学哲学会
Fax. 0426-77-2073【宛名「日本科学哲学会」明記のこと】
e-mail. philsci@comp.metro-u.ac.jp
URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pssj/index.html>

印刷 文成印刷 〒168-0062 東京都杉並区方南 1-4-1